

# 役割関係からみた〈完成期〉の東西漫才

日 高 水 穂

## 1. はじめに

昭和初期の大阪において寄席演芸の一形態として生み出された「しゃべくり漫才」は、時期を違えず東京に進出し、1930～1950年代の〈創生期〉において東西それぞれの寄席を舞台に発展を遂げつつ、テレビ演芸ブームの1960～1970年代において〈完成期〉を迎える<sup>1)</sup>。

日高水穂(2018)では、〈創生期〉の東西漫才を対象として、その談話展開の特徴を分析し、以下のような傾向を読み取った。

上方漫才は、軽口の「フリ(賢役)→ボケ(愚役)→ツッコミ(賢役)」を掛け合いの型として引き継いでいるため、愚役は「おかしみの発話」によって笑いを生み出す一方、賢役は愚役が発する「おかしみの発話」を引き出し、たしなめるという漫才談話を主導する役割を担う。(中略)

東京漫才は、「根問いもの」や「雪てん」など、「無学ながらも当意即妙にたけた男(多くは八五郎)と知識人(もしくは知識人を装った男、多くはご隠居)との掛け合い」によって展開する落語から、ネタの内容のみならず、登場人物のキャラクター設定(愚役=八五郎、賢役=ご隠居)や掛け合いの型をも引き継いでおり、そのため東京漫才の愚役は、落語の八五郎さながらに、漫才談話全体を主導する役割を担う傾向がある。(日高2018:90-91)

上方漫才は「笑いを生み出すための役割の比重が、賢役・愚役のいずれにも片寄っておらず、掛け合いが双方向的である」のに対し、東京漫才は「強烈な個性をもった愚役が一方的に繰り出すフリとボケに、常識人の賢役が合いの手を入れる(あるいは翻弄されながらツッコミを入れる)」という一方的な掛け合いが多くみられるのであるが、こうした傾向はその後の東西漫才にどのように引き継がれていくのだろうか。

本稿では、〈完成期〉の代表的な東西漫才コンビの演目を対象に、漫才談話の展開を主導する役割を担うのが、愚役（ボケ）と賢役（ツッコミ）のいずれであるかを分析する。さらに、愚役と賢役のキャラクター設定と、両者の役割関係から各漫才コンビの特徴を読み取っていく。

## 2. 漫才談話の分析の方法

### 2.1 漫才談話の構造と展開

日高（2018）では、漫才の基本的な談話構造を表1のように整理した。

表1 漫才談話の基本構造

構造	内容		
開始部	(登場) あいさつ／自己紹介／つかみパフォーマンス		
主要部	つかみネタ（前ネタ）		
	本ネタ	導入	
		本題	話題1 話題2 ： 最終話題（トリネタ）
終了部	あいさつ (退場)		

後にみるように、本稿で分析対象とする演目は、本ネタに至るまでに複数のネタを重ねて展開する（当時の寄席の持ち時間に応じた）長尺物である。つかみネタから独立した、本ネタの前に位置するネタを、ここでは「つなぎネタ」と呼んでおく。つかみネタは、本ネタとは直接関わらない内容である場合も多いが、つなぎネタは、本ネタへの橋渡しとなる関連した内容である場合が多い。

漫才談話の〈主要部〉を構成するつかみネタやつなぎネタは、それ自体が「導入」といくつかの「話題」からなる場合もある。

表2 漫才談話の主要部の展開

構造	内容	
主要部	つかみネタ	導入
		本題 話題1 話題2 :
	つなぎネタ	導入
		本題 話題1 話題2 :
	本ネタ	導入
		本題 話題1 話題2 : 最終話題(トリネタ)

日高(2018)では、漫才の掛け合いにおいて「おかしみの表現」として機能する発話を、以下のように分類した。

- (a) おかしみの発話を引き出す発話(フリ)
- ・話題の切り出しの発話(以下〈切り出し〉)
  - ・話題設定の発話(以下〈話題設定〉)
  - ・行為要求(命令・依頼・誘い)や情報要求(質問)などの談話展開設定の発話(以下〈展開設定〉)
  - ・おかしみの発話を発するきっかけとなる発話(以下〈きっかけ〉)
- (b) おかしみの発話(ボケ)
- (c) おかしみの発話に対する反応(ツッコミ)
- ・肯定的反応:《納得》《承認》《肯定的評価》《肯定的感想》など
  - ・否定的反応:《打ち消し》《不審》《訂正》《説明》《否定的評価》《否定的感想》など

これらの「フリ→ボケ→ツッコミ」という「おかしみの談話展開」を含む最小単位として漫才談話の「話段」を設定する。表2で示したように、〈主要部〉のネタはいくつかの話題からなるが、話題は原則として1つ以上の話段によって構成され

るものとする。

本稿では、漫才談話の展開を主導する役割を、愚役と賢役のいずれが担うかを分析するにあたり、各話段の冒頭発話（〈切り出し〉発話）に注目する。〈切り出し〉発話を発した側が、当該の話段の展開を主導する役割を担うと考えられるからである。

## 2.2 〈完成期〉の漫才談話資料について

テレビ時代に入った〈完成期〉の漫才の資料としては、主に、台本資料と実演音声資料（テレビ、ラジオの音源をもとにしたLPレコード、CD、DVDに収録されたもの）が存在する。台本資料は、上方漫才については著名な漫才作家の作品集として刊行された書籍がいくつかあるが、東京漫才については雑誌等に掲載されたものがわずかに認められる程度である。また、台本資料では演者と作家のいずれの言語特徴が現れたものかの判別がつきにくい（台本に忠実な演者とそうではない演者があり得る）。したがって、本稿で分析対象とする漫才談話資料は、東西漫才の比較が可能な、実演音声資料を用いる。なお、〈創生期〉の実演音声資料は、観客のいないスタジオ収録によるSPレコードの音源が中心であったが、〈完成期〉の実演音声資料は、観客を前にして演じられたライブ音源が中心となる。

以下では、〈完成期〉の代表的な漫才コンビとして、上方漫才については中田ダイマル・ラケットと夢路いとし・喜味こいし、東京漫才についてはコロムビアトップ・ライトと獅子てんや・瀬戸わんやを取り上げる。分析対象とする資料は以下の通りである。

表3 〈完成期〉の東西漫才の分析資料

漫才コンビ		演目	音源	収録時期 収録時間
上 方	中田ダイマル・ラケット	僕は幽霊 <sup>2)</sup>	CD『栄光の上方漫才 漫才の神髄2 中田ダイマル・ラケット』（朝日放送ラジオ演芸ライブラリー編、ヨシモトブックス）	1973年 17分29秒
	夢路いとし・喜味こいし	交通巡査 <sup>3)</sup>	CD『お笑い百貨事典 昭和34年～39年・テレビコメディアー・ブーム』（布目英一監修、キングレコード）	1960年代 13分47秒
東 京	コロムビア トップ・ライト	おとほけ 名舞台	CD『東京漫才傑作集3』（保田武宏解説、コロムビアミュージックエンタテインメント）	1960年代 12分51秒
	獅子てんや・瀬戸わんや	温泉案内 <sup>4)</sup>	CD『ラーフィン～爆笑マンザイ特撰集①』（ビクターエンタテインメント）	（収録時期不明） 7分55秒

なお、漫才談話の例文には、以下の下線・囲み線を付して「おかしみの表現」に関わる発話機能を示す。

- \_\_\_\_\_ おかしみの発話を引き出す発話（フリ）  
 □ おかしみの発話（ボケ）  
 === おかしみの発話に対する反応（ツッコミ）

### 3. 〈完成期〉の漫才談話の分析

#### 3.1 中田ダイマル・ラケット「僕は幽霊」

兄ダイマル（1913～1982年・兵庫県生まれ）と弟ラケット（1920～1997年・兵庫県生まれ）の兄弟コンビ。ダイマルは1934年に兄と中田松王・梅王の名でコンビを組み、のちにデパート・ダイマルと改名。デパートの死後、弟のラケットとコンビを組み、爆笑王の異名をとる。初舞台は1941年。愚役をダイマル、賢役をラケットが担当する。ネタの多くをダイマルが自作。「僕は幽霊」は代表作の一つで、1950年にダイマル自作の喜劇台本「頓珍漢幽霊囃子」を元に、漫才台本に仕立て直したものである（朝日放送ラジオ演芸ライブラリー編2008）。

「僕は幽霊」の内容は、表4のようなものである。

表4 「僕は幽霊」の内容

内 容		発話番号	概要	
つかみネタ	導入	001-014	ラケットが恋人と歩いているのをダイマルが見かけた、という設定でラケットをいじる。	
	本題	話題1：恋人の容姿いじり		015-029
		話題2：祝いを洩る		030-113
つなぎネタ	導入	114-129	ラケットの恋人がかつてダイマルと結婚を約束して逃げた女であることを、相手の男（ラケット）に告げる。	
	本題	話題1：恋人をくさす		130-157
		話題2：ダイマルの失恋話		158-206
		話題3：相手の男への復讐		207-279
本ネタ	導入	280-288	女への復讐として、四谷怪談を模して、「ダイマルが失恋男の服毒自殺を装い、幽霊になって化けて出る」という狂言芝居を企て、幽霊の練習をする。	
	本題	話題1：ダイマルの復讐計画		289-301
		話題2：ラケットの復讐計画		302-499
		話題3：幽霊の練習		500-747
		話題4：夜中は怖い		748-760

ラケットの恋人が、実はダイマルのかつての婚約者であったという前半（つかみネタ・つなぎネタ）と、不義理な女への復讐として、ダイマルが幽霊になって化けて出るという狂言芝居を企て、その練習を行う後半（本ネタ）からなる、ストーリー性のある演目である。

表5に「僕は幽霊」の各話段の冒頭発話を抜粋して示す。

表5 「僕は幽霊」の各話段の冒頭発話

内容		冒頭発話（ダ：ダイマル／ラ：ラケット）	
つかみ ネタ	導入	001	ダ：えらい、この間、ええとこ会ったな。
	話題1	話段1	015 　ダ：あれ、どこのオタ、あの、それなー、帽子かぶってね、こう、網のついた帽子をかぶってね。
		話段2	024 　ラ：君は今、オタフクいうつもりやったんやろ。
	話題2	話段1	030 　ラ：オタフクであろうと何であろうと、君には関係ないがな。
		話段2	048 　ラ：ほな、君、何か。僕に祝いするのが嫌やから、そう言うのか。
		話段3	063 　ダ：いや、いや、こら、せないかんなー。
		話段4	073 　ダ：まあ、まあ、そう言うな。
	話段5	084 　ラ：あのなー、僕はこれ、ただでもらうわけやないで。	
話段6	103 　ダ：冗談やがな。		
つなぎ ネタ	導入	114	ラ：何でそうなるのやな。
	話題1	話段1	130 　ラ：惚れているのは、僕より向こうのほうがきついや。
		話段2	143 　ダ：女ちゅうのは最初、男にそううまいこと言いよるわ。
	話題2	話段1	158 　ラ：僕が結婚すると言うたら、君はね、おめでどうの一言ぐらいが常識やないか。
		話段2	177 　ダ：結婚の日取りがちゃんと決まっておったんや。
		話段3	187 　ダ：そうになったら前途は真っ暗や。
		話段4	193 　ダ：さー、もう悄然と家を出て、どこを歩いておるのか無我夢中やな。
	話題3	話段1	207 　ダ：で、彼女に復讐したろうと思ってな……。
		話段2	217 　ダ：ところが、近々、彼女、ほかの男と結婚しよるねん。
		話段3	230 　ラ：まあ、考えたら悔しいやろな。
		話段4	252 　ラ：ほな、僕の今の恋人が、君の……。ちょっと、待て、待て、待てー。

本ネタ	導入	280	ラ：しかし、あの女がそういう女とは知らなんだね。	
	話題 1	289	ダ：あいつを殺すためにね、青酸カリを用意してあるのや。	
	話題 2	話段 1	302	ラ：そんなことをせんでも、なんぼでもほかに復讐の方法があるわな。
		話段 2	324	ラ：そこで、按摩の宅悦がね、何もかもそのわけを話しよったん。
		話段 3	354	ラ：夜が更けるとや……。
		話段 4	368	ラ：とにかく夜が更けるとやね……。
		話段 5	386	ラ：つまり、お岩さんは伊右衛門にだまされた。
		話段 6	426	ラ：で、彼女は君が死んだもんやと思うとるわ。
		話段 7	452	ラ：とにかくね……。
		話段 8	484	ラ：大体ね……。
	話題 3	話段 1	500	ラ：で、君は幽霊、やったことがあるか？
		話段 2	524	ラ：ほな、行くで。
		話段 3	542	ラ：ええか。
		話段 4	554	ラ：ええか。
		話段 5	566	ラ：ええか。
		話段 6	578	ラ：ええな。
		話段 7	590	ラ：君、その手、どないかならんのか。
		話段 8	614	ラ：青火がばーっ……。ポケットの中でやっとなるやないかつ。
		話段 9	624	ラ：青火がばーっ、ぼやがぼーっ……。へたり込んでどないするねんな。何しとんをや、それ。
		話段 10	642	ラ：(囃子方に) ほな、済みませんけど、ちょっと太鼓をお願いします。
話段 11		686	ラ：忘れてもうたやないかー。おい。順序、わからんなくてもうた。	
話段 12		702	ラ：青火がばー。	
話段 13		715	ラ：ちょっと、あのね。	
話段 14		733	ラ：へえ、ほな、行きませ。	
話題 4	748	ラ：幽霊、よう似合うやないかいな。		

つかみネタとつなぎネタではダイマルとラケットの〈切り出し〉発話が混在しているが、本ネタの〈切り出し〉発話はほぼラケットが行っている。本ネタ部分で、ダイマルが〈切り出し〉発話を行うのは、以下に示す話題 1 のみである。

(1) 「僕は幽霊」の本ネタ・話題 1 の談話展開

【本ネタ：本題－話題 1】

- 289 ダイマル：あいつを殺すためにね、青酸カリを用意してあるのや。〈切り出し・話題設定〉
- 290 ラケット：へえっ？
- 291 ダイマル：これ、ジュースにこうまぜるわね。かぼんっ、かぼっ、かぼんっ、ぼっ、ぼっ、ぼっ、ぼっ……。勧めるわ。あいつ、飲みよるで。うごっ、うごっ、うごっ、あうーんっ、ことーんっ  
て言うでもて、これ。
- 292 ラケット：いや、それ、君、正気で言うとの？〈展開設定〉
- 293 ダイマル：そら、言うてまんねんな。
- 294 ラケット：いや、相手を殺したら、君は罪人やで。
- 295 ダイマル：罪人て？
- 296 ラケット：下手したら死刑になるぞー。〈きっかけ〉
- 297 ダイマル：死刑？ 怖いっ、やめさせてくれよ、おいつ。
- 298 ラケット：誰がせいと言うたんや。《打ち消し》
- 299 ダイマル：な、何？
- 300 ラケット：そういうあほなことを考えるなー。《打ち消し》
- 301 ダイマル：どない？

本ネタ・話題1は、ラケットの企てる復讐計画の前に挿入された小ネタであると同時に、以下に示す最終話題のダイマルのボケの布石になっている。

(2)「僕は幽霊」の本ネタ・話題4(最終話題)の談話展開

【本ネタ：本題－話題4(最終話題)】

- 748 ラケット：幽霊、よう似合うやないかいな。〈切り出し〉
- 749 ダイマル：そんなもん、褒めな、おい。
- 750 ラケット：いや、僕が見ても気持ち悪かった。
- 751 ダイマル：そうかー。
- 752 ラケット：ほな、あの調子で行こう。
- 753 ダイマル：あれでな。
- 754 ラケット：ふーん。
- 755 ダイマル：何時ごろに行こう？〈展開設定〉
- 756 ラケット：夜中の1時か2時ごろ。〈きっかけ〉



- 757 ダイマル：昼間にしよういなー、おい。
- 758 ラケット：何でや、夜中に出ないかんやないかい。《訂正》
- 759 ダイマル：夜中、怖いがなー。
- 760 ラケット：そんな、あほな。《否定的評価》

「僕は幽霊」のダイマルは、ラケットを戸惑わせるボケを連発するが、そのキャラクターには小心者の片鱗が見え隠れする。(1)は後半の展開を「しっかり者」のラケットが主導することに説得力を持たせ、さらに(2)のダイマルの「小心者ボケ」をより自然に見せる効果を持つ。こうしたネタの構成とキャラクター設定の巧みさがこのコンビの特徴と言える。

### 3.2 夢路いとし・喜味こいし「交通巡査」

兄いとし(1925～2003年・横浜生まれ)と弟こいし(1927～2011年・埼玉県生まれ)の兄弟コンビ。旅芸人の一座に生まれ、幼少期より全国を回る。1940年に上方漫才の荒川芳丸に弟子入りし、荒川芳博・芳坊としてデビュー。1948年に夢路いとし・喜味こいしと改名。秋田實に師事。いとしの没年まで現役で舞台に立つ。愚役をいとし、賢役をこいしが担当することが多いが、役割を入れ替えて演じることもある。作家の手がけた多くの新作漫才をこなすとともに、自作の演目も多く、そのなかでも特にくり返し演じて肉付けされてきたのが「交通巡査」である。

「交通巡査」の内容は、表6のようなものである。

表6 「交通巡査」の内容

	内容	発話番号	概要	
つかみネタ	話題1：新幹線を利用する新婚旅行	001-012	新婚旅行を話題として新幹線から自動車の話に展開。	
	話題2：自動車を利用する新婚旅行	013-020		
つなぎネタ	話題1：自動車の渋滞	021-042	自動車の渋滞、バスガール、婦人警官についての話題をコントを交えて展開。	
	話題2：バスガール	043-128		
	話題3：婦人警官	129-148		
本ネタ	導入	149-151	信号無視をした男(いとし)が警官(こいし)に職務質問を受けるというコント設定。警官の質問に男が要領を得ない回答を繰り返すという展開。	
	本題	話題1：職務質問		152-201
		話題2：自宅住所		202-256
		話題3：許しを請う		257-258
		話題4：再び自宅住所		259-443
		話題5：本人について		444-530
		話題6：家族について		531-609
話題7：立場逆転	610-631			

前半（つかみネタ・つなぎネタ）で最近の交通事情や女性の職業を話題としつつ、後半（本ネタ）の交通巡査の職務質問コントへと展開する。

表7に「交通巡査」の各話段の冒頭発話を抜粋して示す。

表7 「交通巡査」の各話段の冒頭発話

内容		冒頭発話（い：いとし／こ：こいし）	
つかみ ネタ	話題1	001 い：近ごろは新幹線を利用する新婚旅行が多いなあ。	
	話題2	013 い：自動車で新婚旅行やる人、あるね。	
つなぎ ネタ	話題1	話段1 021 い：自動車なんて多くなったね。	
		話段2 030 こ：パパッ、パパッパ、パパッパッパ、パパッパパパッパッ パパッ。	
		話段3 039 い：実はね、僕は、嫁はんが子供産んでこれから産院に 行くとこなんですけど。	
	話題2	話段1 043 い：そのぐらい気長ういかなあかんで。バスも多なっ たね。	
		話段2 073 い：これがベテランになってごらん。全然違うからな。	
		話段3 101 い：そやけど、この商売に徹するとは恐ろしいもんやね。	
	話題3	129 い：ご婦人の職業が増えたねえ。	
	本ネタ	導入	149 い：やっぱり男性の警官のほうがいいわね。
		話題1	話段1 152 こ：ビビビビビビビビ、君、君、君、君、君。君。寄 りたまえ。
話段2 176 こ：ちょっと、交番来たまえ、交番へ。			
話段3 182 こ：違うの、君は軽犯罪。			
話題2		話段1 202 こ：大体君は？ どこ？	
		話段2 222 こ：つまりね、そら家がなくても誰かの家にはおるん やろ、君。	
		話段3 236 こ：ほいで、この兄のうちは、これはどこ？	
話題3		話段1 257 い：もう、お巡りさん、そんな言わんと堪忍してくだ さいな、もう。	
		話段2 271 い：そんなこと言わんと、僕は誠表にあらわして、初め てやから堪忍してください言うて謝ってんでっせ。	
話題4		話段1 286 こ：兄のうちやね。	
		話段2 316 こ：どこ？	
		話段3 325 い：あの、2月ほど前に大阪から神戸へ宿変えしたん ですが、いかんかったでしょうか。	
		話段4 336 こ：どこ、変わったって？	
		話段5 350 こ：ええ、はい。神戸市のどこ？	
		話段6 358 こ：神戸から？	

本ネタ	話題 4	話段 7	373	い：あの、嵐山行く電車、ご存じですか。
		話段 8	387	い：そこからバスに乗っていただきます。
		話段 9	397	い：そこへこう、たばこ屋さんがありまして。
		話段 10	420	こ：大阪のどこ？
	話題 5	話段 1	444	こ：それから、名前は？
		話段 2	469	こ：イマイユウゾウト。えー、それから年は？
		話段 3	489	こ：えー、で、職は？
		話段 4	506	い：大体僕、学生でしてね。
	話題 6	話段 1	531	こ：えー、で、家族は？
		話段 2	553	こ：えー、これ、どういう関係になんの、これ？
		話段 3	573	こ：それから？
		話段 4	578	い：それから僕の上に弟が1人おりまして。
		話段 5	598	い：それから、妹がオトコでして。
	話題 7		610	い：この巡査、ちょっとあほと違うかいな。

つかみネタとつなぎネタの〈切り出し〉発話は、つなぎネタのコント設定冒頭部分(030)を除いていとしが行っているが、本ネタではいとしとこいしの〈切り出し〉発話が混在している。本ネタ部分のこいしの〈切り出し〉発話は、警官の質問として発されるものであり、いとしの〈切り出し〉発話は、以下に示すように、想定外の回答によって話題を展開するものである。

(3) 「交通巡査」の本ネタ・話題6・話段5の談話展開

【本ネタ：本題－話題6－話段5】

598 いとし：それから、妹がオトコでして。〈切り出し・話題設定〉

599 こいし：な、何？

600 いとし：妹がオトコでして。

601 こいし：女やろ？〈展開設定・きっかけ〉

602 いとし：え？

603 こいし：妹は女やね？

604 いとし：ええ、女のオトコでございます。

605 こいし：妹は女。

606 いとし：オトコ。

607 こいし：女。

608 いとし：名前がオトコっっちゃうの。

609 こいし：けったいな名前ばかりつけとんな、もう。《否定的感想》

(3) に続く最終話題は、以下のように展開する。

(4) 「交通巡査」の本ネタ・話題7（最終話題）の談話展開

【本ネタ：本題－話題7（最終話題）】

610 いとし：この巡査、ちょっとあほと違うかいな。〈切り出し〉

611 こいし：またあほやて。こら。

612 いとし：は？

613 こいし：巡査つかまえてあほ？ あほとは何や、君。あほとは何じゃ。  
本官をおちよくつとんのか、こら。

614 いとし：こら？

615 こいし：こら。

616 いとし：こらとは何ですか。あなたは警官屋さんでしょ？

617 こいし：屋は要らん。

618 いとし：警官が民衆に向かって、こらってな言葉を使用しても構わな  
いんですか、こら。〈話題設定〉

619 こいし：うん、うん。

620 いとし：こらという言葉がいい言葉かね、こら。

621 こいし：いや、これは。

622 いとし：あー？

623 こいし：ああ。

624 いとし：何と思うとんのかね。

625 こいし：うん。

626 いとし：あー？ 何とか言いたまえ。

627 こいし：すまん。

628 いとし：すまんと思うか。〈展開設定〉

629 こいし：謝る。〈きっかけ〉

630 いとし：よろしい。住所、姓名を聞こう。

631 こいし：そんな、あほな。《否定的評価》

いとしのポケは、こいしの威圧的な警官キャラを凌駕する奔放さで、最終的に立

場の逆転を引き起こす。ストーリー性のある演目ではないが、最終話題でいとしがそれまでのとぼけた口調から威圧的な口調に切り替えて巧みに落とす。談話展開の主導権はいずれかに片寄るものではなく、軽妙な掛け合いの小気味よさがこのコンビの特徴と言える。

### 3.3 コロムビアトップ・ライト「おとぼけ名舞台」

トップ（1922～2004年・東京都生まれ）は、別の相方とコンビを組んで1946年に青空トップ・ライトとしてデビュー。1950年に初代ライトの死によって2代目ライト（1927～2010年・埼玉県生まれ）とコンビを組む。1952年にコロムビアレコードと契約し、コロムビアトップ・ライトと改名。1974年にトップが参議院議員になったのを機にコンビ解消。愚役をトップ、賢役をライトが担当する。

「おとぼけ名舞台」の内容は、表8のようなものである。

表8 「おとぼけ名舞台」の内容

内容		発話番号	概要	
開始部	あいさつ	001-003	観客へのあいさつ	
つかみ ネタ	導入	004-007	最近わからない話が多いという導入から、夫の気を引くために近所と自宅に放火をした主婦の話を展開。	
	本題	話題1：昭島のある夫婦		008-027
		話題2：ケチなおやじ		028-069
		話題3：主婦の放火事件		070-134
つなぎ ネタ	導入	135-177	著名人の名前をもじった芸名、著名な芝居の作品名をもじった演目名を披露。	
	本題	話題1：トップの経歴と芸名		178-245
		話題2：芝居の演目		246-283
本ネタ	導入	283-293	トップが新橋の芸者、ライトが絹織物問屋の若旦那の役で即興芝居を披露。	
	本題	話題1：芝居の設定		293-330
		話題2：芝居の実演		331-437

つかみネタで身近なゴシップを話題にしつつ、つなぎネタでトップが芝居（歌舞伎・新劇）経験者であるという設定を導入したうえで、本ネタとして芝居のパロディを実演するという展開である。後半に芝居（歌舞・音曲）を配置する演目構成は、〈創生期〉以前にもさかのぼり得る古風な（定番の）もので、前代からの連続性を感じさせる。

表9に「おとぼけ名舞台」の各話段<sup>5)</sup>の冒頭発話を抜粋して示す。

表9 「おとぼけ名舞台」の各話段の冒頭発話<sup>6)</sup>

内容		冒頭発話 (ト:トッパ/ラ:ライト)	
開始部	あいさつ	001	ラ:お笑いでございます。
つかみ ネタ	導入	004	ト: うーん。しかし、最近はどうもわからん話が多くて いかな。
	話題1	話段1	008 ト:この間ね……。
		話段2	022 ト:で、あそこにね、あるご夫婦が住んだと思ひねえ。
	話題2	話段1	028 ト:というのはね、世の中に変なおやじがいるだろう、よく。
		話段2	040 ト:で、朝出がけに、あのな……。
	話題3	話段1	070 ト:女房にしたって……。
		話段2	088 ト:そうなるのだよ……。
		話段3	104 ト:ところが、かみさん全然、そういうことをしたが、 おやじが気がつかない。
		話段4	110 ト:ついに、かみさんは自分に、頭に来た。
	つなぎ ネタ	導入	135
話題1		話段1	178 ト:私はね、扇雀ね。
		話段2	194 ト:で、何かこう浴衣のひもみたいな感じなんで、すぐ やめて新劇へ行きまして。
		話段3	208 ト:それから、花柳章太郎先生のところへも参りました。
		話段4	220 ト:作家のほうもやりましてね。
話題2		話段1	246 ト:じゃ、君にお尋ねするがね。
		話段2	264-2 ト:じゃ、君、あれ知ってる?
		話段3	274 ト:あれ、ご存じかな。「歌舞伎十八番通い帳」。
本ネタ	導入	283-2	ラ:ようがしよう。
	話題1	話段1	293-2 ラ:君は、ミヨキチ姉さん。
		話段2	311 ラ:君は芸者で、僕はある絹物問屋の若旦那。
	話題2	話段1	331 ラ:大丈夫、大丈夫。はい、スタンバイ。はい、本番。 下から、にこっと笑うの、お客さんのほうを向いて。 にこりと下から見上げる。気持ち悪いな、おい。じゃ、 僕は向こうから歩いてくるから。よろしいね。では、 お芝居。幕があいたところ。そちらから歩いてくる。 僕はあちらから歩いてくる。これは、誰かと思っ たら、ミヨキチじゃないか。
		話段2	352 ト:ケンジさん、随分お見えになりませんでしたわね。
		話段3	360 ト:指折り数えて、かれこれ2年ぐらいかしら。
		話段4	375-2 ラ:ミヨキチ。
		話段5	390 ト:何もあなたがアメリカへ行くからといって、別れる ことなんかないじゃありませんか。
		話段6	397 ラ:ミヨキチ。
		話段7	407 ラ:ミヨキチ。
話段8		417 ラ:ミヨキチ。	

開始部、つなぎネタ、本ネタの〈切り出し〉発話はライトが行っており、賢役のライトが進行役を担っていることがわかる。

一方、つかみネタはトップによるエピソードトークであり、その展開はトップが主導している。また、つなぎネタの話題1では、トップが自身の経歴として、関西歌舞伎の中村扇雀の弟子で「中村サンジャク」、新劇の千田是也の弟子で「マンダコレラ」、同じく新劇の花柳章太郎の弟子で「花柳ショウノウ」、推理作家の江戸川乱歩の弟子で「スマダガワサンボ」の芸名・ペンネームをもらった話を披露し<sup>7)</sup>、話題2では、『瀧の白糸』（泉鏡花の小説『義血侠血』を原作とする演劇）の「前編」の『糸のしらたき』、『婦系図』（泉鏡花の小説を原作とする演劇）の「前編」の『娘系図』、『勸進帳』（歌舞伎の演目）の「後編」の『通い帳』という芝居の演目名を披露する。これらの話題を主導するのは、トップである。

本ネタでは、ライトの主導のもとに芝居を披露するのであるが、以下のように、トップの段取りに反した演技・台詞によってたびたび中断する展開となる。

(5) 「おとぼけ名舞台」の本ネタ・話題2・話段6～7の談話展開

【本ネタ：本題－話題2－話段6】

397 ライト：ミヨキチ。〈切り出し〉

398 トップ：はい。

399 ライト：あれをごらん。〈展開設定・きっかけ〉

400 トップ：まあ、きれいな天井ですこと。

401 ライト：なかなか立派な天井……。あほ。君は芝居やったこと、あんなのか、おい。《否定的評価》

402 トップ：何だよ。

403 ライト：あれをごらんと言ったら、お月様が出てると仮定してるんだ、君。誰が天井の話してんだよ。《説明》

404 トップ：あー、お月様、団体で出る。

405 ライト：団体って、ありゃライト。ライト、俺じゃないか、おい。《説明》

406 トップ：みんなライトが悪いのよ。

【本ネタ：本題－話題2－話段7】

407 ライト：ミヨキチ。〈切り出し〉

408 トップ：はい。

409 ライト：君と初めて会ったあの晩も、ちょうど今夜のようなきれいな

お月様が輝いていたっけな。

- 410 トップ：そうでしたわね。あなたと初めてお知り合いになって、橋のたもとで見た月も、ちょうど今夜のようなお月様でしたわね。  
〈きっかけ〉
- 411 ライト：そうだったな。
- 412 トップ：ごらんなさいよ。おぼろ月夜の名月だわね。
- 413 ライト：ちょっと待て、おい。《打ち消し》
- 414 トップ：え？
- 415 ライト：おぼろ月夜の名月じゃ、まるでかすんじゃって見えねえじゃねえか、おい。《説明》
- 416 トップ：何か俺も変だと思ったんだけどな。

(5) に続く最終話段は、以下のように展開する。

(6) 「おとばけ名舞台」の本ネタ・話題2・話段8（最終話段）の談話展開

【本ネタ：本題－話題2－話段8】

- 417 ライト：ミヨキチ。〈切り出し〉
- 418 トップ：はい。
- 419 ライト：お互いにこうして何度手をとって歩いたかしれねえこの本郷の切り通しからこの湯島の境内。いよいよ今宵限りでこのきれいなお月様とも、君ともお別れだな。〈話題設定〉
- 420 トップ：そうですわね。あなたとお別れしても、私、必ずこの湯島の天神様へ来て、あなたのご無事をお祈りしていますわ。〈きっかけ〉
- 421 ライト：ありがとう、お蔭。
- 422 トップ：あなた。
- 423 ライト：お蔭、泣くんじゃねえ。お月様さえ、笑っているじゃねえか。〈話題設定〉
- 424 トップ：来年の今月今夜、再来年の今月今夜、10年後の今月今夜のこの月が曇ったら、私がどこかの隅で泣いていると思ってください。〈きっかけ〉
- 425 ライト：宮さん。



- 426 トップ：貫一さん。
- 427 ライト：宮さん。
- 428 トップ：私、生きたいわ、生きたいわ。千年も万年も生きたいの。私の病気、治る……。〈話題設定〉
- 429 ライト：治るとも、治るとも。必ず僕の力で直してみせるよ、〈きっかけ〉浪さん。
- 430 トップ：武男さん。
- 431 ライト：浪さん。泣くんじゃない。山のカラスが泣いたとて、お月様さえ、ただ一人。〈話題設定〉
- 432 トップ：赤城の山で見た月も。
- 433 ライト：今またここで見た月も。
- 434 トップ：月に変わりはねえけども。
- 435 ライト：いや、変わるこの身が情けねえ。〈きっかけ〉
- 436 トップ：親分。
- 437 ライト：浅。何をやっとんだ。《否定的感想》

当初の設定である、新橋の芸者役のトップと絹織物問屋の若旦那役のライトが、『婦系図』のお蔭（と早瀬）、『金色夜叉』の宮と貫一、『不如帰』の浪と武男、『国定忠治』の浅と親分にめまぐるしく入れ替わりながら展開する。芝居の台詞の名詞子で盛り上げ、最後のライトの「何をやっとんだ」で鮮やかに落とす。

談話展開上の役割としては、ライトが進行役として全体の流れを管理する一方で、各話題の内容を展開させるのはトップである。トップが展開させる話題においては、ライトは補佐役に徹しており、愚役のトップが「主」、賢役のライトが「従」という役割関係が、このコンビの特徴となっている。

### 3.5 獅子てんや・瀬戸わんや「温泉案内」

てんや（1924年・東京都生まれ）は警察官、わんや（1926～1993年・大阪府生まれ）は市役所の職員から転向して東京漫才の内海突破の弟子となり、1952年にコンビを組んでデビューした。1987年にわんやが病に倒れたことによりコンビ解消。愚役をてんや、賢役をわんやが担当する。長身で恰幅のよいてんやが小柄で髪が薄いわんやをいじり倒すネタが定番。

「温泉案内」の内容は、表10のようなものである。

表 10 「温泉案内」の内容

内容		発話番号	概要	
開始部	あいさつ	001-002	観客へのあいさつ	
つかみ ネタ	話題 1：戸締まり注意の呼びかけ	003-010	観客への呼びかけから、あいさつにかこつけて相方いじり。	
	話題 2：わんやのハゲをいじる	011-016		
つなぎ ネタ	導入	017-048	昔の旅の風情と今の交通の便利さについて、コントを交えながら展開。	
	本題	話題 1：汽車の旅の交流		049-088
		話題 2：汽車と新幹線		089-108
本ネタ	導入	109-129	旅行代理店の店員（てんや）と客（わんや）というコント設定。客の要望に店員が要領を得ない提案を繰り返すという展開。	
	本題	話題 1：旅行の行き先		130-160
		話題 2：旅行の日程		161-180
		話題 3：宿泊場所		181-315
終了部	あいさつ	315	観客へのあいさつ	

前半のつなぎネタで昔と今の交通事情を話題としつつ、後半（本ネタ）の旅行代理店の店員と客のコントへと展開する。

表 11 に「温泉案内」の各話段の冒頭発話を抜粋して示す。

表 11 「温泉案内」の各話段の冒頭発話

内容		冒頭発話（て：てんや／わ：わんや）		
開始部	あいさつ	001	て：たくさんの拍手をいただきまして、ありがとうございます。 ざいます。	
つかみ ネタ	話題 1	003	て：気候もすっかりよくなりましたね。	
	話題 2	011	て：君ははげ色悪いね。	
つなぎ ネタ	導入	017	て：そりゃまあそう。せかせかせかせかした日常生活ですからね、のんびりした生活を送らなきゃいけない。	
	話題 1	話段 1	049	て：ゴンゴンゴンゴン、ゴンゴンゴンゴン。どちらへ行かれる？
		話段 2	059	て：いや、どうのご商売を？
		話段 3	067	て：私は名古屋で。
	話題 2	089	て：それで、夜行車なんてのはもう当たり前だったけどね。	
本ネタ	導入	109	て：だけど、今この旅行ブームでね。	
	話題 1	話段 1	130	わ：こんにちは。
		話段 2	149	て：国内で。
	話題 2	161	て：じゃ、どのぐらいの日数で。	

本ネタ	話題3	話段1	181	て：じゃ、どこに泊まるんですか。
		話段2	193	て：あー。じゃ、探しましょうか。
		話段3	224	わ：で、あの、伊豆温泉だね。
		話段4	243	て：えーっと、ここなんかよろしいようでございますね。
		話段5	257	て：えーとね、新築落成と書いてある。
		話段6	265	て：いや、景色はすごくよくってですね。
		話段7	283	て：えー、風呂。あつ、岩風呂です。
		話段8	295	て：じゃ、あの、部屋聞いてみましょう。
		話段9	301	て：あ、そりゃだめ？ うん、つつるの間の間が。
		話段10	305	て：女中部屋があいてる？
終了部	あいさつ	315-2	て：どうも失礼しました。	

開始部のあいさつを含め、ほぼすべての〈切り出し〉発話をてんやが行っている（終了部のあいさつは〈切り出し〉発話とは見なさないが、やはりてんやが発している）。わんやが〈切り出し〉発話を行うのは、本ネタのコント設定冒頭部分（130）と、以下に示す話題3の話段3のみである。

(7) 「温泉案内」の本ネタ・話題3・話段3の談話展開

【本ネタ：本題－話題3－話段3】

224 わんや：で、あの、伊豆温泉だね。〈切り出し・きっかけ〉

225 てんや：あー、そうですか。

226 わんや：伊豆なんてのは、「いず」行ってもいいなあ。

227 てんや・わんや：うは、は、は、は、は。《肯定的評価》

228 わんや：わかっちゃった？

229 てんや：このやろう。

230 わんや：何だよ。

231 てんや：ほら、また、おかしいこと言いましたよね。

232 わんや：いや、たまには。

233 てんや：あんた、素人じゃないでしょう。

234 わんや：いやいやいやいや。

235 てんや：何か芸人さんでしょう。

236 わんや：あ、わかる？

237 てんや：漫才か何かやってんじゃないの？〈話題設定〉

- 238 わんや：そうなんだよ。  
 239 てんや：何て名前です。〈展開設定〉  
 240 わんや：え？ てんや・わんやの僕はわんやなんだよ。〈きっかけ〉  
 241 てんや：あー、私、てんやのほうがいいだ。  
 242 わんや：そっか。そんなこと言うなよ。《打ち消し》

この話段は、わんやのダジャレを持ち上げたうえで最終的に落とすという展開となっている。わんやが〈切り出し〉発話を行うのは、この発話がわんやがダジャレを言うための〈きっかけ〉発話を兼ねていることによる。こうした特殊な設定がない限り、談話展開の主導権は愚役のてんやが一貫して担っている。

「温泉案内」の終結部分は、以下のように展開する。

(8) 「温泉案内」の本ネタ・話題3・話段8～10の談話展開

【本ネタ：本題－話題3－話段8】

- 295 てんや：じゃ、あの、部屋聞いてみましょう。〈切り出し・話題設定〉  
 296 わんや：聞いてみて。  
 297 てんや：(電話で) あー、もしもし。はいはい。大体、お客さん気に入った。ええ。はげの間？  
 298 わんや：何。《不審》  
 299 てんや：あ、萩の間か。  
 300 わんや：あ、萩か。

【本ネタ：本題－話題3－話段9】

- 301 てんや：(電話で)あ、そりゃだめ？ うん、つるつるの間が。〈切り出し〉  
 302 わんや：おいおいおいおい、何だ、つるつるの間ってのは。《不審》  
 303 てんや：いや、鶴がいるんですよ。  
 304 わんや：2羽かい？

【本ネタ：本題－話題3－話段10】

- 305 てんや：(電話で)女中部屋があいてる？〈切り出し〉  
 306 わんや：おい。お客が行くのに、何で女中部屋へ泊まんなきゃいけない。《不審》  
 307 てんや：いや、上と中の部屋です。  
 308 わんや：あ、失礼、失礼。

- 309 てんや：何言ってるんだ。  
 310 わんや：上、中か。  
 311 てんや：上、中の部屋。  
 312 わんや：女中部屋って聞いちゃったよ。  
 313 てんや：(電話で) は、は、はっはっは。本人だまかしたから。  
 314 わんや：いい加減にしろ。ほんとにもう。《打ち消し》  
 315 てんや：冗談だよ。どうも失礼しました。

てんやのボケは、わんやを翻弄し、不審を抱かせ、いらだたせる。コントの設定のうえで、店員(てんや)に対する客(わんや)であり、発話スタイルもてんやが丁寧体、わんやが普通体を基調としているが、実質的には談話展開の主導権を握るてんやが終始わんやの「上」に立つ。これは他の演目にも認められるこのコンビの特徴である。

### 3.6 〈完成期〉の東西漫才の比較

以上でみてきた4組の漫才コンビの各演目について、〈切り出し〉発話の数を演者ごとに集計すると以下ようになる。

表 12 〈切り出し〉発話数の比較

	上方漫才		東京漫才	
A (愚役)	中田ダイマル	夢路いとし	コロムビアトップ	獅子てんや
B (賢役)	中田ラケット	喜味こいし	コロムビアライト	瀬戸わんや
演目	「僕は幽霊」	「交通巡査」	「おとぼけ名舞台」	「温泉案内」
〈切り出し〉 発話数	A : 12 (27%) B : 33 (73%)	A : 19 (50%) B : 19 (50%)	A : 19 (66%) B : 10 (34%)	A : 20 (91%) B : 2 (9%)

上方漫才の2組は、〈切り出し〉発話の担い手が愚役と賢役で拮抗する、あるいは賢役の比重が高い。これは、フリを賢役が担い、愚役と賢役の双方向的な掛け合いによって談話が展開するという〈創生期〉にもみられた上方漫才の特徴を引き継いでいることを意味する。

一方、東京漫才の2組は、〈切り出し〉発話の担い手として愚役の比重が高い。これは、フリを愚役が担い、愚役が一方的に談話を展開させていくという〈創生期〉にもみられる東京漫才の特徴を引き継いだものと言える。

双方向的な掛け合いによって談話を展開させる上方漫才の2組には、愚役と賢役の関係性に主従関係や上下関係は感じられない。一方で、愚役が一方的に談話を展開させていく東京漫才の2組には、愚役が「主」・「上」で賢役が「従」・「下」という関係性が感じられる。これは各漫才コンビの個性であるとともに、東西それぞれの寄席場で育まれてきた地域性の反映でもあるだろう。

#### 4. おわりに

〈創生期〉の東西漫才が、落語や軽口などの先行諸芸の要素を引き継いでいたように、〈完成期〉の上方漫才にみられる双方向的談話展開と東京漫才にみられる一方的談話展開は、いずれも〈創生期〉から継承されてきたものとみなせる。

一方で、本稿では十分には論じなかったが、〈創生期〉の漫才の笑いが言葉遊び(洒落)に頼るものであったのに対し、〈完成期〉の漫才の笑いは東西を問わず、演目の緻密な構成、想定外の談話展開、演者のキャラクター設定と関係性など、より複雑な要素で彩られるようになっている。1960～1970年代を漫才の〈完成期〉ととらえるのは、この時期の漫才が、先行諸芸から独立して、独自の演芸形態を確立したとみなせるからである。

1960～1970年代は、愚役を「ボケ」、賢役を「ツッコミ」と称するのが定着した時期であり、漫才の演じ方が定型化していく時期でもある。定型化の一例として、漫才の結末に現れる縮めの定型句をあげておこう。「僕は幽霊」と「交通巡査」は、奇しくもともに、賢役の発する「そんな、あほな」で終わっているが、それはこのフレーズが上方漫才の縮めの定型句となっていることを意味する。「おとぼけ名舞台」の「何をやっとなだ」、「温泉案内」の「いい加減にしろ」も、汎用的な縮めの定型句として機能し得るものである。

〈創生期〉の漫才は、愚役によるオチの一言で終わるものが一定数存在するが、〈完成期〉の漫才は、愚役のボケに賢役のツッコミを添えるという掛け合いの型が定型化したことにより、賢役の縮めの定型句も必須となってきたものと考えられる。この定型化の流れは、1980年代以降の〈発展期〉においてさらに顕著になる。

〈発展期〉の漫才は、1980年代初頭の漫才ブームを経て、「伝統芸能化」にあらがう若い演者とメディア（主にテレビのバラエティ番組）によって、その内容も演出も大きく変容し続けている。こうした定型化と革新化のせめぎあいのなかにある〈発展期〉の漫才の多様なあり方をとらえることが、次の課題となる。

付記 本研究の一部は、平成 29 年度関西大学国内研究員研究費および JSPS 科研費 26244024、16H01933、17K02801 によって行った。

## 注

- 1) 門付け芸としての万歳と諸芸（俄（仁輪加）、軽口、音頭など）が融合して寄席演芸化したのち、こうした先行諸芸から「漫才」が分化・独立し、現在に至るまでの過程を段階的に示すと、以下ようになる（日高 2017a・2017b 参照）。
  - 〈黎明期〉明治末期～昭和初頭：門付け芸の万歳から諸芸融合の万才の発生
  - 〈創生期〉1930～1950 年代：ことばの掛け合い芸としての漫才の成立
  - 〈完成期〉1960～1970 年代：ボケ・ツッコミの掛け合いの型の確立
  - 〈発展期〉1980 年代以降：ボケ・ツッコミの掛け合いの多様化
- 2) 「僕は幽霊」には、文字化テキストとして、前田勇（1975）に掲載された速記録がある。
- 3) 「交通巡査」には、文字化テキストとして、喜味こいし・戸田学（編）（2004）に掲載された台本、小島貞二（1978）に掲載された速記録がある。実演音声としては、本稿で使用した音源以外に、DVD『夢路いとし・喜味こいし漫才傑作選 ゆめ、よろこび シャベくり歳時記』（SMEJ）に収録された 1997 年 8 月 16 日放送「笑いの検証 漫才シンポジウム」（毎日放送）の映像資料がある。本稿で使用した『お笑い百貨事典』の音源は、観客のいないスタジオ収録によるもの。「交通巡査」が収録されている『お笑い百貨事典』の副題は、「昭和 34 年～39 年・テレビコメディ・ブーム」となっているが、つかみネタとして新幹線の話が取り上げられていることから、東海道新幹線開業の 1964 年以降に収録されたものと考えられる。本稿では分析資料を 1960～1970 年代に収録されたものにそろえるため、この音源を使用する。
- 4) 収録時期は不明であるものの、このコンビの活動時期から 1960～1970 年代に収録されたものとする。この演目もつなぎネタ部分に新幹線の話が取り上げられていることから、1964 年以降の収録とみられる。
- 5) 2.1 で述べたように、本稿では「話段」を「[フリ→ボケ→ツッコミ]」という「おかしみの談話展開」を含む最小単位」として設定しているが、「おとほけ名舞台」のつかみネタ部分はいわゆるエピソードトークの形をとっており、オチの部分まで「笑い」の要素が現れない。この場合も談話展開上のまとまりは認められるた

め、発話内容の連続性によって「話段」を分割した。

6) 枝番号 (-2) を付した発話は、前半 (表内では省略) に直前の話段の最終発話として機能する発話があり、後半の発話が当該話段の冒頭発話として機能するもの。表 11 も同様である。

7) 著名な役者の名前をもじった芸名の披露は、日高 (2018) で取り上げた芦乃家雁玉・林田十郎の「もとは役者」にもみられ、古くは大阪にわか軽口台本にもみられる定番ネタである。

ピン：わたしもある人の世話で師匠に付きました。一番はじめに付いたのが中村梅玉さん。

太夫：芸名をもらいはったか。

ピン：へえ、梅玉さんの弟子で中村梅毒。

太夫：バイドク。きたない名前や。

ピン：次に付いたのが中村鴈治郎。

太夫：成駒屋、名をもらいなはったか。

ピン：へえ、鴈の一字をもろうて、中村鴈がさ、(後略)

(「大阪にわか 口上」西角井正大編 1981 : 9)

## 引用文献

朝日放送ラジオ演芸ライブラリー (編) (2008) 『CD ブック 栄光の上方漫才』(日沢信哉執筆) ヨシモトブックス

大阪府立上方演芸資料館 (編) (2008) 『上方演芸大全』創元社

喜味こいし・戸田学 (編) (2004) 『いとこいし漫才の世界』岩波書店

小島貞二 (1978) 『漫才世相史』毎日新聞社

西角井正大 (編) (1981) 『大衆芸能資料集成 8 舞台芸 I 俄・万作・神楽芝居』三一書房

日高水穂 (2017a) 「漫才の賢愚二役の掛け合いの変容—ボケへの応答の定型句をめぐって—」『国文学』101 関西大学国文学会

日高水穂 (2017b) 「漫才の賢愚二役の名称と役割の変容—「ツッコミ」「ボケ」が定着するまで—」『近代大阪文化の多角的研究—文学・言語・映画・国際事情—』関西大学なにわ大阪研究センター

日高水穂 (2018) 「談話展開からみた〈創生期〉の東西漫才」『国文学』102 関西大学国文学会



前田勇 (1975) 『上方まんざい 八百年史』 杉本書店

(ひだか みずほ／本学教授)